

〔重修本草綱目啓蒙<sup>二十六</sup>〕燈蓋

アブラツキ ア○プ○ラ○ガ○ハ○ラ○ケ○ ア○プ○ラ○ザ○ラ 江州

一名缸典籍便覽 朱火 金缸 銀缸 蘭缸共同上

〔貞丈雜記<sup>八</sup>調度〕一古書にあぶらつきとあるは、油杯とも油蓋とも書て、燈の油を入れる油皿也、あぶ

らつきのきの字すみてよむべしに、ごるは非なり、油次にてはなき也、油あぶらを入る瓶をば、油滴と

〔儀式<sup>四</sup>〕踐祚大嘗祭儀下

太政官符諸國每國有符

應造新器中略

和泉國中略 油瓶二合中略 油杯六口 已上御料

〔延喜式<sup>二十四</sup>主計<sup>四</sup>〕凡左右京五畿内國調、一丁輸錢隨時増減、其畿内輸雜物者中略 陶器中略 一丁中略

壺杯燈蓋各五十口中略

凡諸國輸調中略 陶器中略 一丁中略 燈蓋二百口、

〔延喜式<sup>三十六</sup>主殿<sup>十六</sup>〕釋奠料春秋並同中略 燈蓋八口加盤下皆准之○中略

十二月晦夜供奉内裏并大極殿豐樂殿武德殿儺料等雜物中略 中宮油八斗、油杯八百口、

〔執政所抄<sup>上</sup>二月〕八日、法性寺修二月事、

油杯三百 年預下家司成旬所、下文下知深草作手等家司職事所司下家司參向仰之、

〔日本新永代藏<sup>二</sup>〕佛の箔を削る頓慾の鉋

材木河岸の桔梗屋として、今冬木三文字屋にも、肩を並ぶる商人、以前に身代の時の話を聞くに、油土器の鑄物を拵へ、内を朱にぬらせ、永代土器と名付て賣出しけるに、去とは常と違ひ、先奇麗にて見よげに、掃除の度毎に油すたらす、光り一段強し、是朱に燈火の照合ゆへなり、然も油の減格